

2023年3月19日（大斎節第4主日、A年）

牧師メッセージ

「死ではなく、命にとどまれ」

（ヨハネによる福音書 11:1-44）

司祭ヨセフ太田信三

マルタも、マリアも主イエスを愛していました。そして主イエスも、マルタ、マリア、そしてラザロの兄弟のことを愛しておられました。しかし、いざラザロの死という現実直面した時、「信じる」ということは崩れてしまいました。彼女たちは今日の福音でも、主イエスを最大限敬っています。しかし、主イエスが人に命を与えることができるということまでは信じていなかった。いや、もしかしたら信じていたのかもしれませんが。しかし、愛する兄弟の死という圧倒的な現実直面し、見えない神の力よりも現実の悲嘆が勝ってしまった。「神さまでも無理だ」と諦めてしまった。事実、その気持ちは「終わりの日の復活の時に復活することは存じています。」というマルタのセリフによく表れています。確かに信じています、けれども、この現実変えられないでしょう、とマルタは言っているのです。兄の死という圧倒的な現実の前に、信じる事が出来ない。人間の信仰の限界をありありと見せられるような、何ともリアルな場面です。

マリアも人々も同じです。圧倒的な死の前では、主イエスですら無力であると思っています。「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」と彼らは言います。先週の箇所にあった盲人の目を開く主イエスの業を見ても、聞いていても、死という圧倒的な出来事の中で、「死者をよみがえらせる」などということは信じる事ができないのです。主イエスはこの人々の姿を目の当たりにした時、心に憤りを覚えられました。主イエスは何に憤りを覚えられたのでしょうか。もちろん、死の闇の中で信仰を失ってしまう人間の姿に怒られたのでしょうか。しかし、それよりも主イエスの憤りは、人間から神を信じる心を奪うものに対してです。つまり、主イエスは「死」に対して憤られたのです。人々から信仰を奪ってしまったのは、ラザロの死という現実です。この人間の死に対する無力感と、神への不信仰にこそ、主イエスは憤り、挑戦し、ラザロを復活させるのです。

これはヨハネによる福音書における最後の奇跡です。ここから、主イエスの歩みは、十字架上の死へと急激に加速します。主イエスの憤りは、人間の不信仰への憤りであり、死への憤りでした。しかし、そればかりではない。自分自身がよいよ向かおうとしている十字架上でのご受難への苦しい思いもあったに違いありません。そこに思い至る時、わたしたちは主イエスのご受難を見つめなければならないのです。なぜなら、主イエスのご自分の死によって、死に打ち勝たれたからです。「主イエスの死への憤り」は、主イエスのご受難によって成し遂げられる、死への勝利へと向かうのです。しかし、マルタやマリア、ラザロの死に立ち会った人々がそうであったように、死に留まるならば、わたしたちは、神のもとにある、生も死も超えた世界に生きることはできません。主イエスはその人間に向かって、「わたしが身をもって示すから、だから、「死に留まるな！」と叫び、わたしたちに強く呼びかけてくださっているのです。「命に留まれ！」「わたしに留まれ！」と呼びかけられているのです。